

渋谷地域における街路ファサードの色彩構成と環境認知及び行動特性について その1

- 行動特性の変化について -

日大生産工 (学部) ○島田 憲和
 日大生産工 (院) 岡野 由佳
 日大生産工 大内 宏友

1. 研究の背景と目的

近年、都市空間において、景観に対する関心は環境問題の一つとして人々に広く認識されつつある。人は景観をすべてそのまま記憶することなく、街区の色彩構成や形態といった物理的要素が心理や行動に相互に影響を与え、総体として心理的景観を作り出しているといえる。その中でも色彩は重要な要素であり、眺望主体である人間及びその集合の心理的イメージ(共感)は、景観を形成する大きな一因となっている。

これまでの既往研究においては、東京を代表とし異なる性格を有する銀座・原宿・渋谷地域を研究の対象とし、行動特性と環境認知の相関を分析、外来者が認知している色彩をひと目で把握できるモデル「色彩認知3Dモデル」を構築し、考察を行なってきた。

本稿では渋谷地域を対象地とし、2003年に計測された心理量調査によるデータと、およそ10年の時を経た2012年に計測されたデータを比較検討することにより、人々の行動範囲の変化を分析し、報告するものとする。

2. 調査概要

調査対象地域は東京都渋谷区渋谷であり、特にメイン通りである公園通り・ファイヤー通り・文化村通り・道玄坂にスポットを当てた。対象地域において人の行動範囲とその心理的要因を分析するため、心理量調査としてアンケートを行った。

2.1. 心理量調査

一般の人々のとらえる認知を明らかにするために、現地においてアンケートを行った。調査項目は、属性調査、行動調査、景観認知調査、イメージ調査である。

行動調査に関しては白地図を用い被験者に行動範囲を直接記入してもらい、景観認知調査の色彩認知調査に関しては、カラーチャートを用い被験者に色を選んでもらった。なお、アンケート地点は偏りをなくするため、特定の地点では行わないように留意しランダムに行った。表1に調査期間・時間帯、表2に被験者概要、表3にアンケート内容を示す。

表1 調査期間・対象時間

地域	時間	対象時間	心理量調査期間	物理量調査期間
渋谷	昼間	10時～14時	2003年5月	2003年 5月
渋谷	昼間	10時～14時	2012年8月	2012年 8月

表2 被験者概要

調査年		2003	2012
性別	男性	44	47
	女性	56	53
年齢	10代	25	36
	20代	56	28
	30代	8	10
	40代	3	10
	50代	4	5
	60代以上	4	11
合計		100	100

表3 アンケート内容

属性調査	性別、年齢、職業
行動調査	頻度、目的、行動範囲 使う道のり
景観認知調査	色彩認知調査 ランドマーク調査
イメージ調査	15項目に対し5段階評価

3. 色彩認知・行動強度による認知特性

アンケートより得られた景観認知調査-色彩認知調査より、最も印象的な色1色と印象的な色5色をグラフで図示し、対象地域における特徴を明らかにした。縦軸に11色相、横軸に12トーンで表記した。図1に、渋谷地域2003年の色彩認知を示す。

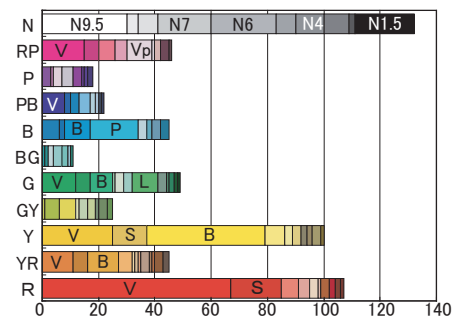


図1 色彩認知特性 渋谷2003年

3.1. 行動強度

アンケートより得られた行動調査-行動範囲より、圏域図示法^{*1)}から得られたデータを地図上に重ね合わせ、行動範囲の強弱を4段階で表記した。

左に2003年の行動強度図、右に2012年の行動強度図を全体・世代別・性別ごとに示す。

Color composition of street facade and environmental acknowledgment and action characteristic in the region of Shibuya. part1

- Formative process in the action characteristic -

Norikazu SHIMADA, Yuka OKANO and Hiroto OHUCHI

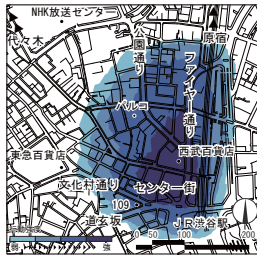


図2 行動強度図 2003年

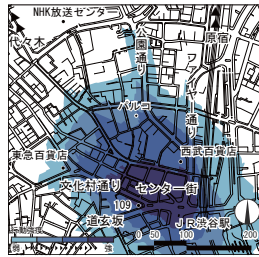


図3 行動強度図 2012年

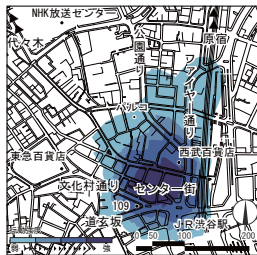


図4 10代 2003年

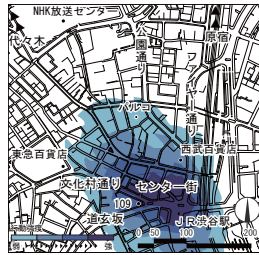


図5 10代 2012年

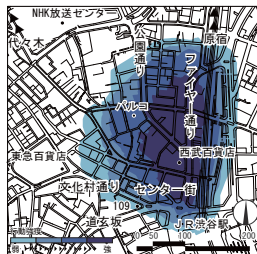


図6 20代 2003年

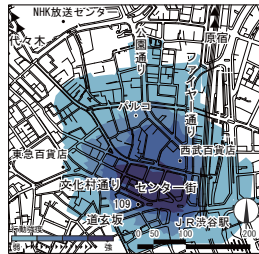


図7 20代 2012年

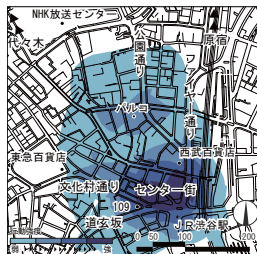


図8 30代以上 2003年

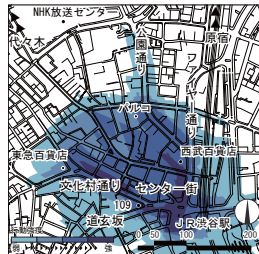


図9 30代以上 2012年

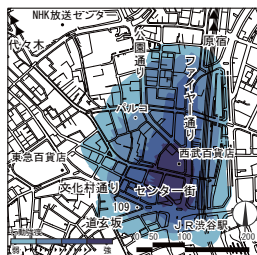


図10 男性 2003年

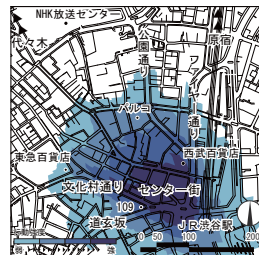


図11 男性 2012年

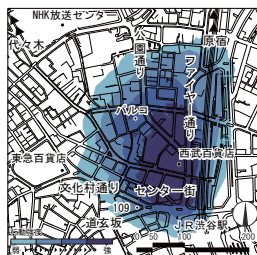


図12 女性 2003年

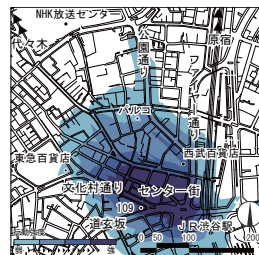


図13 女性 2012年

4. まとめ

本稿では、心理量調査から得られた2003年と2012年の行動強度図、またその年代・性別により分類した結果の比較により、以下のことを考察をした。

4.1. 2003年と2012年の行動強度図の比較

どちらも領域が面的に広がっていくという特徴が見受けられた。2003年の行動強度図(図2)では、南北方向-ファイヤー通り及び公園通り方向に強い行動強度が見られ、2012年の行動強度図(図3)では、東西方向-センター街及び文化村通り沿いに強い行動強度が見られた。

4.2. 各年代別の行動強度図の比較

[10代]2003年の行動強度図(図4)と2012年の行動強度図(図5)では、図2・図3に似通った傾向の行動強度が、より狭い範囲で展開している。

[20代]2003年の行動強度図(図6)では、ファイヤー通り及び公園通り沿いに広い範囲で強い行動強度が見られた。2012年の行動強度図(図7)では、弱い行動強度の範囲は広いものの、強い行動強度の範囲はセンター街付近に狭く展開している。

[30代以上]2003年の行動強度図(図8)では、西武百貨店周辺とパルコ周辺に分散して強い行動強度が見られた。2012年の行動強度図(図9)では、特定の店舗ではなく文化村通り及び公園通り沿いに、線的に強い行動強度が展開している。

4.3. 男女による行動強度図の比較

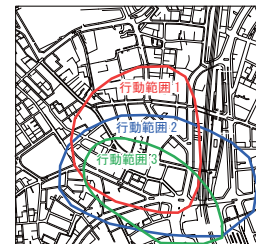
[男性]2003年の行動強度図(図10)ではファイヤー通り沿いに強い行動強度が見え、やや線的に領域が展開している。それに対し2012年の行動強度図(図11)では、文化村通り沿いに行動強度が見え、やや面的に領域が展開している。

[女性]2003年の行動強度図(図12)では、ファイヤー通り及び公園通り沿いに、広い範囲で面的に強い行動強度が見て取れた。それに対し2012年の行動強度図(図13)では、文化村通り沿いに強い行動強度が見える。また、公園通り沿いにも強い行動強度が見られ、線的に領域が展開している。

[注釈]

*1 圏域図示法

対象地域の範囲を示す適切なスケールの地図を提示し、その上に被験者の特定の領域、または境界点、分節点を記入してもらうものである。よって評価空間の把握を目的とするものといえる。



[既往論文]

- 1) 富田雅美、田胡智子、大内宏友：都市景観における街区の色彩構成と環境認知及び行動特性との相関について—銀座・原宿地域におけるケーススタディー—日本建築学会技術報告集第17号 2003.6
- 2) 大内節子、松原三人、大内宏友：街区の色彩構成と環境認知及び行動特性との相関による色彩認知3Dモデルの構築、2006年カラーフォーラム
- 3) 鈴木紀之、松原三人、大内宏友：銀座・渋谷地域における街路ファサードの色彩認知の布置と外来者の行動特性、2007年カラーフォーラム